
タイムカプセル

月原 智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイムカプセル

【Nコード】

N2037B

【作者名】

月原 智

【あらすじ】

未来に託した約束は、必ず果たされる・・・？

第1話

プロローグ

私達は約束した。

2人は 明日も一緒にいると。

1ヶ月後も、半年後も、1年後も・・・。

そして、約束の日が来れば、結婚しようと誓っていた。

私達はタイムカプセルに2人の思いを約束することにした。

タイムカプセルの中には、未来の自分、そして相手へのメッセージがこめられていた。

それと、2人の名前だけが書かれた未完成の婚姻届が1枚・・・。

それらは、ちいさな缶につめられて、向日葵の下に埋められた。

そう、それは2人が出会ったあの場所に・・・。

【Love on the cake】

私が詩音と出会ったのは、とても寒い冬の日だった。

そのころの私は、毎日のようにバイトに追われていた。

冬の一大イベントのクリスマスに向けての注文を受けたり、早めに届けてという注文のケーキを届けたりしているバイトだった。

そんな私の生活といえば、もちろん彼氏がいるわけでもなく、ただ、学校↓バイト↓帰宅 の変わり映えない日々を送っていた。けれど、そんな日が終わる日がきた。

―12/24―

クリスマスイヴだというのに、もちろん私はバイトをしていた。バイト後の予定なんてものも、もちろんなかった。

―PM11:00―

だんだん店が込んでくる。

その中に、詩音がいた。

彼を見つけたときに湧いたあの感情……。

なんてよばいいかなんて、わからなかった。

一目ぼれに似た、切ない衝動……。

「予約していた、宮原です。」

彼は私の前に立ち、さわやかな笑顔で言った。

私の中で一瞬、時間が止まった気がした。

手に持っていたリボンがスルリと、手から落ちていった感覚で我に返った。

「宮原様ですね？少々お待ちください。」

営業スマイルに顔をもどし、ケーキを取るために振りかえった。

初めて鼓動が早くなっていることに気づく。

深呼吸……。

少しだけ、落ち着いた気がした。

名前とケーキのラベルを確認して箱を取った。

「お待たせいたしました。こちらの商品でよろしいでしょうか？」
ケーキ箱とラベルを見せて確認をとる。

彼は、喋ることなくうなずいた。

「では、引き換え券をお願いします。」

そういった、一連の動作を終えると彼を見送った……。けれど、後姿をいつまでも見送ってなんていられない。

物悲しさを閉じ込めて、私は仕事へともどつた。

第2話

—AM2:00—

クリスマスイルミネーションで彩られた街中を通り、家へと向かう。

幸せそうに手をつなぎながら、横を通り過ぎるカップル達……。そんな街中で、私だけが無色だった。

通りを外れたところに小さな公園がある。

いつも通って帰る公園。

人ごみが苦手な私にとっての逃げ道だった。

クリスマスだというのに、飾りが何一つ、つけられていない場所……。

やっと自分の場所に帰ってきたきがした。

深呼吸……。息苦しさが溶けていった。

ふと目をあげてみると、ベンチに人が座っているのが見えた。

それは彼だった……。泣いていた……。

それに気づいた私の体は、感情が追いつく前に走り出した。

何も考えずに、おもむろに声をかけた。

「あのお、大丈夫ですか？」

私の声に気づいたらしく、急いで顔をふいていた。

そしてあの笑顔にもどった。

つぶれたケーキ箱を私に見せながら、彼は笑った。

つぶれたケーキ箱を見て、私は少しだけ悲しくなった。

「これ、ホントは彼女と食べる予定だったんです。

けど……。彼女が俺とは違う男と歩いているのをみてしまって……。」

それ以上、彼の言葉が続くことはなかった。

そんな彼を見て私が思ったことは、もしかしなくてもおかしいだろう。

私は彼を見て、“愛おしい”と思った・・・。

何か出来ることはないかと、ひたすらに考えた。

ケーキ・・・。そうだ、売れ残りをもらっただ。

私は笑顔で彼に言った。

「これ、よかつたら一緒に食べませんか？」

ナンパな女に思われたかもしれない。

でも、私にとってそれはどうでもいいことだった。

「私の家すぐそこなんで来ませんか？ずっとここにいると風邪引いちやうし・・・。」

彼は何一つ私の言葉に対して、ただ一言だけ言った。

「いいんですか？」

彼がそういったのを聞いて、私は笑顔でうなずいた。

第3話

【約束のタイムカプセル―1】

彼と出会ったあの日から、私の生活は色づいていった。

何をしてても、詩音と一緒にいたら幸せだった。

朝早くでかけるときも、一緒におきて一緒に朝食をとった。

夜遅く帰ったときでも、何時まででも詩音は起きていてくれた。

「付き合おう。」

その一言だけが2人の間にはなかったけれど、一緒に住んでいたし、誰から見ても幸せなカップルに見えていた。

その日が来るまでは……。

ある日帰宅してみると、いつもより豪華な食事とワインがテーブルに並べられていた。

満面の笑みで詩音が待っていた。

「どうしたの？こんな晩御飯、初めてじゃん。」

詩音の笑顔につられて、私も笑顔になった。

「俺、仕事決まったんだ！だから、お祝いしたくて！」

「そうなの？それはお祝いしなくちゃね！！」

私は嬉しくて仕方がなかった。

その日私は、明日も朝から仕事があるというのに、朝まで騒いでいた。

―AM 6:30―

目覚ましの音で起こされた。

「頭いったぁ……。あれっ？詩音？しっおくん！！」

気付いてみると、家の中に詩音の姿はなかった。

頭は痛かったけど、力いっぱい叫んだ。

「しおゝん！どこ？？イタタタタ・・・。」

ふと、今までのことが全部“夢”だったような気になった。
涙がゆっくりと流れていく。

そのときだった。

「ただいま。」

優しい声と一緒に、詩音が帰ってきた。

「涙目になって、そんなに頭痛きついのか？」

困った顔をしながら、彼は頭痛薬を差し出した。

けれど私はソレを受け取らなかった。

頭痛薬なんかよりも、詩音がいることをこの手で確かめたかった。

そう考えているうちに、いつの間にか体が動いていた。

なんの前ぶれもなく抱きついた私に、一瞬戸惑った詩音もすぐに私を包み込み返してくれた。

私は詩音に頭をなでられながら、涙が止まるまで泣き続けた。

第4話

第三話【約束のタイムカプセル―2】

その日は、結局会社を休んだ。

泣き止みはしたが、さすがに二日酔いには勝てなかったのだ・・・。

―AM 11:00―

会社への連絡も終わり、痛み止めとコーヒーを一杯。

詩音はというと、昨日決まった仕事場の上司との最終的な話をまとめに出かけていた。

「久しぶりの1人の時間・・・。」

私の声は、だだっ広い部屋に消えていった。

なぜかこみ上げてくる寂しさを紛らわそうと、掃除を始める。考えてみると、掃除をすることも久しぶりだった。

気がつけば、部屋の隅にホコリがたまっていた。

指を折りながら、掃除をしていなかった日にちを数えてみる。

「2週間?!」

思わず声が出てしまう。

ハアと短いため息をついて、掃除にもどることにした・・・。

―PM 2:00―

「そら、お腹も鳴るよねえ・・・。」

まだ少し掃除していない場所が残ってはいたけど、

先に昼食をとることにした。

朝動けなかった私のかわりに、詩音が作ってくれた食事・・・。

記憶に薄っすらと映る詩音のエプロン姿。

手馴れた手つきでシチューを作っていた。

「ありがとね。詩音・・・。」

感謝の気持ち、自然に言葉になる。

そして、お腹の音も更に増して、私を急かしてくる。

「もうちょっと待ってよ。」

お腹に話しかけるといふ、少々お間抜けな光景。
ご機嫌な私はそんなことを気にするはずもなく、
その気分のまま台所へ向かった。

スープ皿に手を伸ばす。

パリンッ

鮮やかな皿の割れる音が、耳に入ってくる。

浮かれすぎていた自分に怒った。

冷静な気分を取り戻して、早々と割れた皿を片付けた。

次の皿は慎重に取り出した。

ホッとしてまたもや皿を落としそうになる。

慌てて受け止めて鼓動を落ち着ける。

「あゝあ。」

まあ、割れてないだけマシとした。

急いで鍋の蓋をあける。

フワッとシチューのいい香りが漂う。

そのときだった。

体に違和感を覚えた。

軽い吐き気が襲ってくる。

慌ててトイレへと駆け込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2037b/>

タイムカプセル

2010年10月28日04時44分発行